

未来

人権教育啓発シリーズNO.3



人は誰もが人間らしく幸せに生きる権利をもっています。しかし、「世の中には女性と男性しかいない」「男性は女性を、女性は男性を好きになるのがあたりまえ」などの決め付けた考え方や発言によって、自分を好きになれなかったり、ありのままの自分を表現できなかったりして生きづらさを感じている子どもたちがいます。今月はこの問題について考えてみましょう。

すべての子供たちが笑顔で生きられる社会をつくりましょう

「性的マイノリティ」ということばを最近よく耳にします。テレビ番組で取り上げられたり、先日、アメリカではそれらの人々を狙った銃乱射事件が起こったこともありました。子どもたちが自分らしく安心して幸せに生きていくためには、一人一人の違いが認められたり、「ありがたい自分でいいんだ」と感じられたりするようになっていくことが大切です。

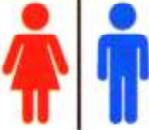
性的な多様性について理解しましょう

人間の性は「男」と「女」に二分できるものではなく、「体の性」「心の性」「好きになる性」など様々な要素が複雑に絡み合い構成されていて、個人的な差があるものだということが、認識され始めました。また、それらの違いを法的に認める自治体も表れてきました。

「これが普通」「こうあるべき」と思われている性の在り方にあてはまらない少数の立場にある人たちは、総称して「性的マイノリティ（LGBTともいわれる）」といわれますが、決して異常なことではありません。背が高い、低い、走るのが速い、遅いなどのように、個人の特徴としてとらえられると良いのではないのでしょうか。違いは決して「変」ではないのです。

子どもたちの「生きづらさ」を理解しましょう

性的マイノリティの子どもたちは身近に存在します。民間の研究機関による調査では、7.6%（30人のクラスで2～3人の割合）という結果もあります。その子たちは、日常生活の様々な場面で生きづらさを感じていることもあります。たとえば

 <p>制服を着るのがいやで学校に行きたくない。</p>	 <p>学校ではトイレに行きにくい。多目的トイレがあったらいいのに・・・。</p>	 <p>好きな人のことは誰にも言えない。だから、友達と恋愛の話はしない。</p>	 <p>自分はどう生きていけばいいのか分からない。将来が思い描けない・・・。</p>	 <p>「ホモ、レス、オカマ」など性的マイノリティをネタにした冗談やからかいがづらい。</p>
---	--	---	---	--

性的マイノリティの子どもたちは、そうでない子どもたちに比べ、自己肯定感や自尊感情が低く、社会の中で生きづらさを感じているという報告もあります。

「性的マイノリティ」について正しい知識を身につけるとともに、違いを認めあえる社会をつくっていくことで、すべての子どもたちが笑顔で生きられる社会をつくれるのではないのでしょうか。日光市および、市内小中学校では、子どもたちの違いを認めあえる環境作りを進めています。



(栃木県人権教育指導者用リーフレット 参照)